

「光の子として歩みなさい」

エフェソの信徒への手紙 第5章8節

聖書は「光」についての信仰のイメージを大切に考えます。旧約聖書の最初に記される創世記に、神様が世界を創造された、その記述があります。「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった」（創世記1・1～3）。聖書は言います。世界は混沌、暗闇の中にあった。それは現代の私たちの世界に起こっている無秩序、世界を暗闇が支配し、悲しい事件ばかりが起こっている。そのことの象徴です。しかし神様がその様な世界に対して「光あれ」とお語りになり、そして「光があった」のです。世界の暗闇を照らし、希望に生きられる光を与えてくれた、と言うのです。

聖隷こども園ひかりの子の歩みは、聖書の信仰を基とする歩みです。それは、この園に集う皆が、聖書の語る「光」の力を与えられ、この世界の暗闇に打ち勝つことが出来る、「光の子」として生きられるようになる、神様の祝福の歩みです。「光の子として歩みなさい」という、聖隷こども園ひかりの子が最も大切にこの聖書の御言葉は、子どもたち皆が、「光の子」として成長することができる歩み、悲しいことの多いこの世界の中で、力強い希望として成長することが出来る、その歩みのことを語っています。

遠州教会 牧師 石井佑二